

幼稚園進級児・新入園児混合クラスにおける 仲間関係の縦断的变化

大島みずき¹⁾ 中澤 潤²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部非常勤講師, 東京学芸大学大学院連合教育学研究科・博士課程

²⁾千葉大学・教育学部

Longitudinal study of peer relationship in the moved up/ newcomer mixed kindergarten class

OSHIMA Mizuki¹⁾ NAKAZAWA Jun²⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan,

Doctor Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本論文では、進級児・新入園児混合クラスにおける幼児の年中から年長にかけての仲間関係についてソシオメトリック調査を用いて縦断的に検討した。調査の結果、以下のことが示された。(1)年中時点では2年保育児よりも3年保育児が仲間として選択されることが多い。(2)年長時点では、保育年数による被選択数の差はなくなる。(3)年中・年長を通して3年保育児は3年保育児を仲間として選択しやすく、2年保育児は2年保育児を選択しやすい。

This study examined the peer relationship of kindergartners in moved up/newcomer mixed class. Children in moved up/newcomer mixed class did sociometric peer nomination in class at the time of 4 and 5year old. The results show; (1) In 4year old class, children select moved up kindergartners as friend than newcomer kindergartners. (2) (1) was not seen in 5year old class. (3) In both 4year and 5year old classes, moved up kindergartners select moved up kindergartners as friend, and newcomer kindergartners also selected newcomer kindergartners as friend.

キーワード：仲間関係 (peer relation) ソシオメトリック調査 (sociometric test) 幼稚園児 (kindergartner)
縦断研究 (longitudinal study)

問題と目的

幼稚園は子どもたちにとって初めての社会生活の場である。幼稚園における仲間関係は、その後の対人関係の基礎になる。そのため、これまで幼児の仲間関係については2者関係の形成から集団内地位や仲間入り、いざこざ、仲間関係が発達に与える影響についてなど、様々な側面から研究が行われてきた(高櫻, 2006)。

ソシオメトリック地位

ソシオメトリック調査による仲間関係の研究は多く、人気児として仲間として選択されやすい子どもや、仲間として選択されにくい子どもの特徴の検討が行われている。例えば、仲間からの肯定的指名数が多く、否定的指名数が少ない「仲間から好かれている幼児」は、友好的で攻撃性が低く、社交性が高いことが示されている(Braza, Braza, Carreras, Muñoz, Sánchez-Martín, Azurmendi, Sorozabal, Gracia & Cardas, 2007; Denham & Holt, 1993)。また、「仲間から拒否される」ソシ

オメトリック地位の低い幼児・児童は、適切な会話を妨害する行動が多く、集団行動を正しく認識せず(Putallaz, 1983)、相互作用が少なく、相手に対して不適切な言葉かけが多い(Black & Hazen, 1990)。さらに、仲間から拒否される幼児は攻撃性が高いこと(Ladd & Burgess, 1999)、あるいは引っ込み思案傾向が強いことも示されている(Harrist, Zaia, Bates, Dodge & Pettit, 1997)。

ソシオメトリック地位の形成

ソシオメトリック地位が形成される過程をみると、男児についての調査では、クラスメイトから拒否されている男児であっても、地位形成の初期には他児と多くの接触を試みていることが示されている(Coie, & Kuper-smidt, 1983)。しかし、その相互作用についてはポジティブなものも多くあっても、同時にネガティブな相互作用も行っている場合には、長期的には仲間内での人気低下する(中澤, 1992)。また、3歳児においても、仲間を評価する基盤としてその評価時点に先行する行動の特徴が存在し、初期に仲間とのポジティブな相互作用を行うものは後に高い社会的地位を受けることも示されている(中澤, 1992)。

連絡先著者：大島みずき

方 法

ソシオメトリック地位の変容

では、一度形成された幼児期のソシオメトリック地位は安定したものなのだろうか。前田(1995, 1997)は、年中時点から年長時点にかけての2年間では人気児や拒否児がその地位を維持する可能性が高く、2年間はソシオメトリック地位が比較的安定していることを示した。また、Walker(2009)は、5歳児を対象に半年間の観察と、ソシオメトリック調査を行うことで、ソシオメトリック地位の安定性が観察でも見られることを示している。

しかしながら、これら幼児の仲間関係が「安定している」という結果(前田, 1995, 1997; Walker, 2009)は、全ての子どもたちが進級時に同一クラスに持ち上がる場合、または同一クラスの年度内での変化についての検討であった。進級時、新たな仲間が加わるような場合、仲間関係はどのような影響を受けるのだろうか。前年度に培われた仲間関係は維持されるのだろうか。新しい仲間が集団に参加することで、元のクラスの仲間との関係には影響されるのだろうか。また、新しく集団に参加する子どもたちは、前年から継続している仲間関係にどのように参加するのだろうか。

近年、X幼稚園における新しい試みとして、年中クラスにおけるクラスの編成方法の変更があった。X幼稚園の年中児は半数が年少クラスからの進級児であり、半数が年中から入園してくる新入園児である。これまでは、年中のクラスを「進級児クラス」「新入園児クラス」の2クラスに編成していたが、各クラス進級園児・新入園児を半数ずつの2クラスを編成することとなった。同一のクラスに、すでに1年間を幼稚園で過ごしてきた子どもと、新たに幼稚園に入ってきた子どもがいるという状況では、子どもたちはどのような仲間関係を作るのだろうか。そして、入園時期の違いはそのままクラスが持ち上がる年長時においても影響するものなのだろうか。

本研究では、X幼稚園において年中時点で年少から進級してくる幼児と、年中になって新たに幼稚園に入園してくる幼児がほぼ同数であるクラス(進級・新入混合クラス)を対象にソシオメトリック調査を行い、彼らの形成する仲間関係に昨年からの在園しているか否かが影響しているかを検討する。吉村(1997)は年中男児がリーダーシップを持った子どもを遊び相手として選択しやすいことを示している。1年間の在園期間がすでにある進級園児の3年保育児は、幼稚園生活には慣れており新入園児である2年保育児にとってはリーダーとなるだろう。そのため、年中時点では新入の2年保育児は3年保育児を遊び相手として選択しやすいのではないだろうか。一方、進級児はこれまでの仲間関係を継続させ、進級児を仲間として選択しやすいのではないだろうか。そのため、3年保育児の被選択数は2年保育児よりも多くなることが予測される。

さらに、本調査では同一の子どもたちに対して年長時点でも同様の調査を行うことで、進級・新入混合クラスの年中時点の仲間関係の特徴が1年間持続するものであるかを検討する。

調査協力児

200x年から200x+1年の間にX幼稚園で年中・年長であった同一クラスの幼児。年中時点(1年目)でクラス人数は34名であったが、年長時点(2年目)では転園で32名となっていた。本調査では2年間継続して在籍した32名(男児16名, 女児16名)を調査の対象とした。対象児32名のうち、14名(男児6名, 女児8名)は年少時に幼稚園に入園し、年中に持ち上がりで進級している3年保育児であり、18名(男児10名, 女児8名)は年中時点で幼稚園に入園している2年保育児であった。なお、年中から年長に上がる際は全員が同一クラスで持ち上がりとなっていた。

材 料

クラス成員の顔写真一覧(各写真2cm×2cm)・記録用紙・調査者用のクラス名簿

手 順

それぞれの時点において個人面接法によるソシオメトリック調査を行った。調査協力児に対して、クラス成員の顔写真一覧を見せ、最初に自分の顔を確認してもらった。次に、数名のクラスメイトの名前を上げ、その子どもの写真を指示してもらい、クラスメイトの顔と名前が一致していることを確認した。

その後、ソシオメトリック調査を行った。本調査では肯定的指名のみを尋ねた。「あなたが遊ぶ時に一緒に遊びたいお友だち、あなたが好きなお友だちは誰ですか? この写真の中から探して教えてください」と質問し、調査協力児が示した子どもの名前を記録用紙に記入した。また、その理由についても尋ね、記録用紙に記入した。同様に「その次は誰?」と尋ね、3人まで遊びたい友だちの名前とその理由を挙げてもらった。なお、調査協力児が4名以上の子どもの名前を挙げた場合は、そのまま回答を行ってもらい、備考欄に記した。3名の友だちの名前を挙げるができない場合も、強制はしなかった。

結 果

ソシオメトリック調査から他児からの選択された数である被選択数と、お互いに選択しあっている回数である相互選択数を算出した(表1)。

表1 被選択数・相互選択数平均

	被選択数		相互選択数	
	年中時	年長時	年中時	年長時
3年保育	3.71 (1.77)	2.86 (2.14)	.86 (.88)	.71 (.79)
2年保育	2.33 (1.65)	2.94 (2.29)	.78 (.77)	1.17 (.79)
総 和	2.94 (1.81)	2.91 (2.19)	.81 (.82)	.97 (.78)

()内はSD

被選択数

保育年数(2)×学年(2)についての分散分析を行った。保育年数、学年いずれについても有意な主効果は見られなかったが、保育年数×学年の交互作用が有意だった ($F(1, 30) = 4.32, p < .05$)。下位検定を行った結果、年中時において2年保育児よりも3年保育児の被選択数の方が多いが、年長児ではその差は見られないことが示された。

相互選択数

保育年数(2)×学年(2)についての分散分析を行った。保育年数、学年の有意な主効果は見られなかったが、保育年数×学年の交互作用に有意な傾向が見られた ($F(1, 30) = 3.04, p < .10$)。下位検定を行った結果、2年保育児は年中時よりも年長時において相互選択数が高くなる傾向が見られたが、3年保育児ではそれは見られなかった ($LSD, p < .05$)。

被選択数・相互選択数の相関

3年保育児と2年保育児別に年中時点の被選択数・相互選択数、年長時点の被選択数・相互選択数についての相関を求めた(表2)。その結果、3年保育児・2年保育児共に、年中・年長の両時期で被選択数と相互選択数の間に有意な相関が見られた。3年保育児では年中時点の被選択数と年長時点の被選択数、相互選択数、年中時の相互選択数と年長時の相互選択数の間にも有意な相関が見られた。

選択した友だちの保育年数

保育年数別に年中・年長時点において何年保育の仲間を何人選択しているのかを求めた(表3)。子ども自身の保育年数(3年保育児・2年保育児)×被選択児の保

育年数(3年保育児選択・2年保育児選択)×学年(年中・年長)についての繰り返しのある分散分析を行った。子ども自身の保育年数・被選択児の保育年数、学年それぞれの有意な主効果は見られなかったが、子ども自身の保育年数×被選択児の保育年数 ($F(1, 30) = 5.31, p < .05$) の交互作用が有意であり、被選択児の保育年数×学年 ($F(1, 30) = 4.03, p < .10$) の交互作用に有意な傾向が見られた。保育年数×被選択児の保育年数に関して下位検定を行ったその結果、3年保育児は3年保育の幼児を選択することが多く、2年保育児は2年保育の幼児を選択することが多いことが示された。また、友だちの保育年数×学年については、3年保育児は年長時点よりも年中時点に選択されやすいこと、2年保育児は年中時点よりも年長時点に選択されやすいことが示された ($LSD, p < .05$)。

考 察

被選択数と相互選択数

年中時点の被選択数は2年保育児よりも3年保育児の方が高かった。3年保育児は2年保育児よりも1年早く幼稚園に入園していることから、幼稚園のことも良く知っており、リーダーシップを発揮することもできるのだろう。そのことが3年保育児の被選択数を高めることになっているのではないだろうか。

一方で、年中時点の相互選択数に保育年数による違いは見られなかった。年中児の相互選択数の平均はおおよそ1人であった。調査を行ったのは6月下旬から7月上旬であり、年中クラスに入りおよそ3カ月が経過していた。この短い時間で2年保育児も、お互いを選択する友人関係を1名のクラスメイトとは築けていることとなる。

しかし、被選択数において年中時点で見られた差は年長時点ではなくなることが示された。また、相互選択数については、2年保育児の年中時点よりも年長時点の方が多くなっていた。1年間という時間をかけて2年保育児が幼稚園に慣れ、自分の力を十分に発揮できるようになることで、年長時点では2年保育児、3年保育児の仲間関係は同等のものとなるのだろう。

年中時点・年長時点の被選択数と相互選択数の相関からも同様のことが言えるだろう。3年保育児は年中時点、年長時点の被選択数、相互選択数の相関はそれぞれが高いものであった。これは、3年保育児は年中時点で仲間からの被選択数の多い子どもは年長時点でも仲間からの被選択数は多く、同様のことが相互選択でいえるということである。つまり、3年保育児の仲間からの選択される数から見る社会的地位は、1年間の中で変化しないことがわかる。一方で、2年保育児については、年中時点の仲間からの被選択数は年長時の被選択数とは相関がなく、相互選択数でも同様であった。つまり、2年保育児の被選択数から見る社会的地位は変化していることになる。3年保育児は年少期の1年間の中で、幼稚園における自己をある程度確立させていることが予測される。そのため、年中時点での仲間からの評価は簡単に揺らぐものではないのだろう。しかし、2年保育児は年中における1年間を通して徐々に自己を確立していくために、年

表2 年中・年長時点の被選択数と相互選択数の相関

	年中被選択	年中相互選択	年長被選択	年長相互選択
年中被選択		.72**	.68**	.59**
年中相互選択	.54**		.31	.61**
年長被選択	.40	.29		.66**
年長相互選択	.14	.31	.63**	

上段：3年保育児
下段：2年保育児

表3 年中・年長時点の選択者内訳

		年中時点選択内訳		年長時点選択内訳	
		3年保育児	2年保育児	3年保育児	2年保育児
選択者	3年保育児	2.00 (.88)	0.86 (.86)	1.43 (.94)	1.50 (.85)
	2年保育児	1.28 (.83)	1.50 (.86)	1.17 (.62)	1.72 (.57)
総和		1.59 (.91)	1.22 (.91)	1.28 (.77)	1.63 (.71)

()内はSD

中時点と年長時点では評価に関連がなくなることが示された。

選択した仲間の保育年数

選択した仲間の保育年数については、年中時点・年長時点で一貫して3年保育児は3年保育児を、2年保育児は2年保育児を選択しやすい傾向が見られた。被選択数では、年中時点では3年保育児の被選択数が2年保育児よりも多い結果となっていた。選択した仲間の保育年数と被選択数は、裏表に近い関係ではあるが、選択数などの差からこのような結果の違いが生じているのかもしれない。

年中時点では1年早くから幼稚園にいて3年保育児の方がリーダーシップを発揮する機会も多く、幼稚園における遊びにも精通していることから、2年保育児も3年保育児を「遊びたい仲間」として選択しやすいのではないかと予測したが、予測は支持されず、2年保育児は2年保育児を選択しやすいという結果になった。新しいクラスに入った時点で、3年保育児は3年保育児の間で仲間関係がすでに形成されている状態であったことが予測される。さらに、「知らないお友だち」がたくさん入ってくる中で、すでに知っている仲間との結びつきが強くなった可能性も考えられる。このような状態の中で、新入園児であった2年保育児は、すでにできあがっている仲間関係に入るのではなく、自分と同じように新しく入ってきた者同士で仲間関係を作ろうとするのだろう。

年長時点でも選択した仲間の保育年数について入園時期と同様の影響が見られたことは、年中時点での「新入園児」「進級園児」のつながりが年長時点まで影響することを示すこととなる。実際、年長時点における仲間選択において、その理由を尋ねたところ「年少の時からずっと一緒だった」という回答を挙げる幼児もおり、彼らの年月を経た仲間関係のつながりの強さを垣間見ることができた。

一方で、3年保育児を選択することが年長時点で減少することも示された。3年保育児は年中時点ではリーダーシップを発揮しやすく、幼稚園での遊びにも精通していることから一緒に遊ぶ相手として選択しやすかったのだろう。1年経過する中で2年保育児であっても幼稚園の中でリーダーシップを発揮し、遊びを楽しむことができるようになるため「3年保育児ならではの」特徴が1年間でなくなる可能性が考えられる。

まとめと今後の課題

本研究からは以下のことが示された。

1. 年中時点では2年保育児よりも3年保育児が仲間として選択されることが多い。
2. 年長時点では、保育年数による被選択数の差はなくなる。
3. 年中・年長を通して3年保育児は3年保育児を仲間として選択しやすく、2年保育児は2年保育児を選択しやすい。

本研究における課題として、まず年少期の仲間関係のデータが得られなかったことが挙げられる。年少期にど

のような仲間関係を持って年中に進級してきたかを知ることで、さらに深く進級・新入混合クラスの仲間関係についての検討が可能であるだろう。さらに、調査協力児の少なさも課題の一つである。本研究では調査対象が1クラスのみである。そのため、本研究の結果が一般的なものなのか、このクラスの特徴であったのか疑問が残るところである。今後さらに複数のクラスについて縦断的な検討を行うことが必要だろう。

引用文献

- Black, B., & Hazen, N.L. (1990). Social status and patterns of communication in acquainted and unacquainted preschool children. *Developmental Psychology*, 26, 379-387.
- Braza, F., Braza, P., Carreras, M.R., Muñoz, J. M., Sánchez-Martín, J.R., Azurmendi, A., Sorozabal, A., García, A. & Cardas, J. (2007). Behavioral profiles of different types of social status in preschool children: An observational approach. *Social Behavior and Personality*, 35, 195-212.
- Coie, J.D., & Kupersmidt, J.B. (1983). A behavioral analysis of emerging social status in boys' groups. *Child Development*, 54, 1400-1416.
- Denham, S.A., & Holt, R.W. (1993). Preschoolers' likability as cause or consequence of their social behavior. *Developmental Psychology*, 29, 271-275.
- Harrist, A.W., Zaia, A.F., Bates, J.E., Dodge, K.A., & Pettit, G.S. (1997). Subtypes of social withdrawal in early childhood: Sociometric status and social-cognitive difference across four years. *Child Development*, 68, 278-294.
- Ladd, G.W., & Burgess, K.B. (1999). Charting the relationship trajectories of aggressive, withdrawn, and aggressive/withdrawn children during early grade school. *Child Development*, 70, 910-929.
- 前田健一 (1995). 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 *教育心理学研究*, 43, 256-265.
- 前田健一 (1997). 幼児の仲間関係に関する研究：ソシオメトリック地位の2年間にわたる持続と変動 *愛媛大学教育学部紀要教育科学*, 44, 91-109.
- 中澤 潤 (1992). 新入幼稚園児の友人形成：初期相互作用行動、社会認知能力と人気 *保育学研究*, 1, 98-106.
- Putallaz, M. (1983). Predicting children's sociometric status from the behavior. *Child Development*, 52, 986-994.
- 高櫻綾子 (2006). 幼児期の仲間関係に関する研究の動向 *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 46, 259-267.
- Walker, S. (2009). Sociometric stability and the behavioral correlates of peer acceptance in early childhood. *The Journal of Genetic Psychology*, 170, 339-358.
- 吉村 斉 (1997). 幼児期における協調性の発達と仲間

関係の変化について一年中期から年長期にかけての縦断的検討—高知学園短期大学紀要, 27, 9-16.

内で行った調査のデータを使用したものである。調査にご協力いただいたお子様、先生方、及び調査者となった幼児心理学実験を受講した学生に心から感謝申し上げます。

【付記】

本論文は平成22, 23年度の「幼児心理学実験」の授業